

創世記48章「ヨセフの子への祝福継承」

1A ヤコブの養子 1-7

2A 両手の交差 8-20

1B 二人の抱擁 8-12

2B アブラハムとイサクの名 13-16

3B 弟への祝福 17-20

3A ヨセフの墓 21-22

本文

創世記 48 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、48 章まで来ました。いつも、一節ずつの学びは午後礼拝で行っていますが、本日は午後礼拝がないので、今朝、一節ずつ、48 章全体を見ていきたいと思います。ここで大事になる言葉は、「継承」です。ヤコブが、間もなく息を引き取る時期になって、いかに自分に与えられている信仰を、後の世代に引き継ぐのかが、大きな課題になっています。

私の信仰生活は、かれこれ 36 年経っています。けれども、ここ数年まで真剣に考えて来なかったことは、「自分の信じていることを、受け継がせる」ということです。自分がいかに、先代の信仰を、忠実に継承しているかどうか？ということについては、とても気を使っています。まず、主イエス・キリストご自身の教え、使徒たちの教え、それから、教会における先人たちがいます。またカルバリーチャペルの働きを聖霊が起こされたわけですから、そこに忠実でありたいと願っています。

けれども、ここ数年に気づいたきっかけは、奉仕者の心得の学びです。そこに、ただ自分が知っているだけでなく、知っていることを伝えなければいけないことが書かれています。パウロがテモテに書いた第二の手紙に、こうあります。「2:2 **多くの証人たちの前で私から聞いたことを、ほかの人にも教える力のある信頼できる人たちに委ねなさい。**」委ねるとか、任せるとい言葉を、パウロはテモテに手紙の中で使っています。

元々信仰というのは、だれかが他の人に伝えていくことによって、聖霊がそれぞれに示されて受け継がれていくものです。私たちの教会も、信仰歴は背景など、いろいろですが、キリストのからだ全体として、任せられている信仰を次の人たちに伝えていくという使命の中に存在しています。

1A ヤコブの養子 1-7

前回、私たちは、ヤコブの家族がエジプトに下って、それからしばらく経った時のところまで読みました。彼らが、ゴシェンの地に住み、多くの子を生み、大いに数が増えていきました。ヤコブは、

エジプトに下った時は 130 歳でしたが、さらに 17 年生きて、147 歳になっていました。その時に、彼は、エジプトに私を葬ってはならない、かならず先祖の墓に葬ってくれと、ヨセフに誓わせました。そうです、ヤコブの家族は、血肉の家族であります、信仰の家でもあるのです。主が約束された地は、カナン地です。そしてヤコブは、アブラハム、イサクの信仰を受け継いでいる者です。その祝福にあずかっている者として、アブラハムとイサクの葬られているところに自分も葬られることは、証しそのものであり、使命でありました。48 章はその続きです。

¹ これらのことの後、ヨセフに「お父上が、御病氣です」と告げる者があったので、彼は二人の息子、マナセとエフライムを連れて行った。² ヤコブに「息子さんのヨセフが、今お見えになりました」との知らせがあった。それで、イスラエルは力を振り絞って床の上に座った。

ヨセフは、ヤコブの死期が近づいているのを日々一刻、感じ取っていたことでしょう。それで、病氣だと聞いて、まず連れて行ったのは自分の二人の息子、マナセとエフライムです。この二人が、カナン地は、おそらく一度も見たことがないと思われます。父ヨセフがヘブル人というだけで、母は祭司の娘でありエジプト人であったし、エジプトの生活のことしか知りません。しかしヨセフは、自分は、父ヤコブの信仰を受け継ぐ者だという確信を持っています。それを、自分の息子たちにも受け継がせなければいけないという使命感を抱いていたことでしょう。

そしてヤコブ自身も、ヨセフが来たという知らせを受けて、「力を振り絞って床の上に座った」とあります。ヤコブ自身が、族長として、自分のしなければいけない最後の務めであり、とてつもなく大切な務めであることを知っていました。それで、病身なのに、力を振り絞って座りました。名前が、「イスラエル」になっていることにも注目してください。主が彼に与えた、勝利するという名です。

³ ヤコブはヨセフに言った。「全能の神はカナン地ルズで私に現れ、私を祝福して、⁴ 仰せられた。『見よ、わたしはあなたに多くの子を与える。あなたを増やし、あなたを多くの民の群れとし、この地をあなたの後の子孫に永遠の所有地として与える。』

ヤコブは、父イサク、そしてその父アブラハムに現れ、契約を結んでくださった神を、自分自身が知ったのは、ルズです。これは、彼が神の家と名づけた、ベテルのことです。そこに、「全能の神」すなわち、エル・シェダイが現れました。アブラハムに現れた神です。天のはしごの夢の中で、現れてくださいました。

そして、アブラハム、またイサクに与えたのと同じ約束を受け継がせるようにして、お与えになりました。それが、第一に「多くの子を与える」です。これは、エジプトに生きた 17 年の間にも、約束の実現を垣間見えています。それから、第二に「あなたを多くの民の群れ」とすることです。つまり、民として、国とするということです。

第三に、「この地をあなたの後の子孫に永遠の所有地として与える」であります。カナンの地を、イスラエルが永遠の所有地として与えられています。この第三の約束について、だれがどんなに反論しても、今のイスラエルの地のいわゆる先住民がユダヤ人であることは、証明できません。歴史文献においても、遺跡においても証明されています。アラブ人、キリスト教徒、いろいろな勢力がそこを支配しましたが、一つの民、一つの国として生きてきたのは、唯一、ユダヤ人です。

⁵ 私がエジプトのおまえのところにやって来る前に、エジプトの地でおまえに生まれた、おまえの二人の子は、今、私の子とする。エフライムとマナセは、ルベンやシメオンと同じように私の子となる。
⁶ しかし、二人の後でおまえに生まれる子どもたちは、おまえのものになる。しかし、彼らがゆずりとして受け継ぐ地では、彼らは兄たちの名を名乗らなければならない。

ここです、ヤコブがエフライムとマナセを、そのまま自分の養子にします。これが、どのような意味になるかは、お分かりになるかと思います。ヤコブの相続を、そのまま受け継ぎます。彼らがそれぞれ部族の長となります。エフライム族、そしてマナセ族です。ヨセフからは、二部族がでて来ることになります。長子の権利を受け取っているのと実質、同じになります。二倍の分け前を受け取っているからです。そしてヨセフが、第三の息子、第四の息子を得たら彼らは、ヨセフの子としてヨセフからの相続を受けますが、後に約束の地に入った時、エフライムかマナセの名を名乗らないといけない、とあります。

ここで、ヤコブは意識して、「ルベンやシメオンと同じように」と言っています。ルベンが長男、シメオンが次男です。しかしルベンは、ラケルの女奴隷ビルハと寝ました。そしてシメオンは、シェケムで虐殺と略奪を働きました。次の章で、ヤコブがこの二人が、兄たちとしての分け前を得られないことを預言します。

ですから、ヤコブがしているのは、血縁以上に、はるかに大事なものを、それは法的な息子というか、契約による子です。父のものを受け継ぐということにおいての息子です。これが、今の私たちにどう関わるのでしょうか？大いにあります。「ロマ 8:15 あなたがたは、人を再び恐怖に陥れる、奴隷の霊を受けたのではなく、子とする御霊を受けたのです。この御霊によって、私たちは「アバ、父」と叫びます。」ここの「子とする御霊」とは、「養子とする御霊」ということです。

キリストは、神のただ独りの息子です。永遠の昔から、初めからこの方は神と共におられ、神ご自身でありました。父のものをすべて受け継ぎ、父の愛を受けておられます。イエスが地上におられた時に、天から父が、「これは、わたしの愛する子」と宣言されました。それは、父のものをすべて受け継ぐ子であり、神ご自身なのだということです。

その父と子の中に、私たちがキリストを信じる信仰のゆえ、養子縁組にされたということです。

神の家族の中に入れられました。もちろん、そこには列記とした差があります。イエスは、神の御子であり、神ご自身です。私たちは、神のかたちにかたぎられ、被造物です。しかし、神のかたちであり、神に似せて造られた者であり、父なる神が息子に注いでいた愛と、約束していた相続を、キリストにあって私たちにも分け前を与えるということです。これが養子になったということです。

続けて読めば、驚くべきことが書いてあります。「ロマ 8:17 子どもであるなら、相続人でもあります。私たちはキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているのですから、神の相続人であり、キリストとともに共同相続人なのです。」共同相続人だということです。これは、同じ分を受け取るという意味であり、神がキリストにご自身のものを相続させたのと同じ分量で、私たちも相続することなのです！それは、私たちがキリストと一つになったから、キリストのうちにいるからで、この方にあって、父からのものを同じように受け取るということです。

ここで、マナセとエフライムのことを考えてください。自分の知っているカナンの地というのは、あくまでも父が若い時に住んでいたところにしか過ぎません。そして、祖父ヤコブの家がエジプトにやってきました。けれども、彼らと一緒に過ごさずに、ヨセフの住んでいる家にいたはずで、エジプトの身なりをして、話していた言葉もエジプト語であった可能性が大です。しかし、ヨセフは、父の神のこと、信仰のことについてはしっかりと教えていたはずで、しかし、それだけなのです。

しかし、直接、イスラエルの子になることで、自分自身がイスラエルに対する神の約束が、そのまま自分たちに受け継がれるということになります。それが、彼らには大きな恵みでありながらも、大きな挑戦になることでしょう。まだ住んだことのないところに思いをはせ、また共に生活をしていなかった家の者として、生きることになるのです。

これこそが、私たちの信仰の継承です。私たちは、全く新しい故郷、全く新しい家族に帰属し、全く新しい国を相続する者になりました。それらは、これまで見慣れたものではないのですが、しかし、そのようにふるまい、そのように生きないといけません。そこに希望を抱くことによって、今までの古い生き方を捨てて、新しい生き方を身に付けます。それが、エジプトに生まれ育ちながら、カナンの地を相続すると言われたエフライムとマナセと同じ、信仰の継承であります。

⁷ 私のことを言えば、パダンから帰って来たとき、その途上のカナンの地で、悲しいことにラケルが死んだ。エフラテに着くにはまだかなりの道のりがあるところだった。私は、エフラテ、すなわちベツレヘムへの道にあるその場所に、彼女を葬った。」

ヨセフにとっての母、ラケルについてのことを話しています。エフラテあるいはベツレヘムへの道がかなりあるところで、彼女が死に、葬りました。彼女の墓は、ユダヤ教の人たちはベツレヘムのすぐそばのところで祈りを献げていますが、そこではありません。エルサレムより北にある「ラマ」と

いう町の近くになります(1サムエル 10:2)。

2A 両手の交差 8-20

1B 二人の抱擁 8-12

⁸ イスラエルはヨセフの息子たちに気づいて言った。「この者たちはだれか。」⁹ ヨセフは父に答えた。「神がここで私に授けてくださった息子たちです。」すると、父は「私のところに連れて来なさい。彼らを祝福しよう」と言った。¹⁰ イスラエルは老齢のために目がかすんでいて、見ることはできなかった。それで、ヨセフが彼らを父のところに近寄らせると、父は彼らに口づけして抱き寄せた。

イスラエルは、目がかすんでいて、だれかがいる気配はしましたが、誰なのかは見分けが付きませんでした。それでヨセフが、神のくださった息子ですと答えています。今、イスラエルが、この二人を自分の子とするとしたばかりです。それで、そのまま祝福しようと言っています。そうです、かつてヤコブが父イサクから、祝福を受けたようにするということです。ここで、確かにヤコブに与えられた神の祝福が、エフライムとマナセにも受け継がれるということです。イサクはかつて、だまされて、エサウを祝福するつもりがヤコブを祝福しましたね。それで、エサウが後でやって来て、祝福してくださいと懇願するも、祝福してしまったからできないと言いました。これは、契約の押印のようなもので、ずっと後に効力の発揮するものです。

¹¹ イスラエルはヨセフに言った。「おまえの顔が見られるとは思わなかったのに、今こうして神は、おまえの子孫も私に見させてくださった。」¹² ヨセフはヤコブの膝から彼らを引き寄せて、顔を地に付けて伏し拝んだ。

ヤコブと呼ばれている時は、彼は、すべてのわざわいが自分にふりかかったと言いました。ヨセフはいなくなり、もう一人の兄弟、すなわちシメオンがいなくなり、そしてベニヤミンも失うのではないかと恐れました。しかし、今、すべてを主におゆだねして、それでヨセフの顔を見ることができました。そして、今、彼の息子たちも見ることができるよう、神がしてくださったと言っています。しかも、ただ息子たちではなく、「子孫」と言っています。信仰によって、この息子たちから増えていく子孫も、見ているのです。

それで、ヨセフは、息子二人が膝のところに集められていましたが、そこから引き寄せて、三人で、顔を付けて伏し拝んでいます。これは、ヤコブを拝んでいるのではなく、ヤコブの子孫に連なることを畏れ多く思い、神の前に出ているのです。

2B アブラハムとイサクの名 13-16

¹³ それからヨセフは二人を、右手でエフライムをイスラエルの左手側に、左手でマナセをイスラエルの右手側に引き寄せた。そして二人を彼に近寄せた。¹⁴ ところがイスラエルは、右手を伸ばし

て弟であるエフライムの頭に置き、左手をマナセの頭に置いた。マナセが長子なのに、彼は手を交差させたのである。

実は、1 節と 5 節に、このあべこべが示されていました。ヨセフは、1 節で、「マナセとエフライムを連れて行った」とあります。しかし、ヤコブは、5 節で、「エフライムとマナセは」と、あべこべに呼んでいるのです。マナセが長男で、エフライムが次男ですが、次男の名を先に呼んでいます。ここでも、ヨセフは、右の手でマナセを祝福してもらおうとして、自分から見て左手でイスラエルに引き寄せて、エフライムはその逆にしています。それを、ヤコブが敢えてあべこべにしているのです。

¹⁵ 彼はヨセフを祝福して言った。「私の先祖アブラハムとイサクが、その御前に歩んだ神よ。今日のこの日まで、ずっと私の羊飼いであられた神よ。¹⁶ すべてのわざわいから私を贖われた御使いが、この子どもたちを祝福してくださいように。私の名が先祖アブラハムとイサクの名とともに、彼らのうちに受け継がれますように。また、彼らが地のただ中で 豊かに増えますように。」

ここで、アブラハムとイサクに与えられた神の祝福が、ヨセフの子たちに与えられますように、という祈りになっています。まず、「アブラハムとイサクが、その御前に歩んだ神」と呼んでいますね。彼らが御前に歩んだ神です。私たちも、彼らを祝福された同じ神を信じています。この方の御前に私たちも歩みます。

そして、次が特徴的です。「ずっと私の羊飼いであられた神」です。神を羊飼いと呼んでいるのは、聖書でここが初めてです。エジプトにおいては、羊飼いは忌み嫌われています。しかし、ヤコブにとっては、決してそんなことはありません。父イサクも、そしてアブラハムも、羊飼いでありました。そして彼も長いこと羊飼いであり、羊に対してどのような思いを持っているのか知っていました。神は、同じようにして羊飼いとなってくださったということです。つまり、神は自分を養ってくださった、ということです。そして、神は自分を導いてくださったということ。それから、神は自分を敵から守られたということです。そして、ダビデは後に、彼も羊飼いだだったので、王にあってから、羊飼いの心で治めていました。そして、良き羊飼いが来るとエゼキエルは預言し、イエスご自身が、わたしが良い羊飼いだと言われました。

そして、「すべてのわざわいから私を贖われた御使い」ですね。ヤコブは、エサウに会う時に、御使いたちが彼を守っていました。そこを彼はマハナインと名づけました。そして、神の御使いと格闘して、ももつがい外されましたが、エサウの心はすでに変えられていました。

そして、「私の名が先祖アブラハムとイサクの名とともに、彼らのうちに受け継がれますように」とあります。そう、ヤコブの名が受け継がれることによって、初めて、彼の息子たちがアブラハムとイサクの祝福を受け継ぐようになるのです。彼の祈りは、ここで大きかったです。アブラハムとイサク

から、自分の名が断絶すれば、もうここで神の祝福の契約は途絶えてしまいます。自分の名が、共に呼ばれるからこそ、イスラエルの十二部族が、アブラハムの祝福によって祝福されます。

そして、約束の地において、子たちが豊かにされますようにと祈ってしめくっています。

3B 弟への祝福 17－20

¹⁷ ヨセフは、父が右手をエフライムの頭に置いたのを見て、それは間違っていると思い、父の手を取って、それをエフライムの頭からマナセの頭へ移そうとした。¹⁸ ヨセフは父に言った。「父上、そうではありません。こちらが長子なのですから、右の手を、こちらの頭に置いてください。」¹⁹ しかし、父は拒んで言った。「分かっている。わが子よ。私には分かっている。彼もまた、一つの民となり、また大いなる者となるであろう。しかし、弟は彼よりも大きくなり、その子孫は国々に満ちるほどになるであろう。」²⁰ 彼はその日、彼らを祝福して言った。「おまえたちによって、イスラエルは祝福のことばを述べる。『神がおまえを エフライムやマナセのようになさるように』と。」こうして彼はエフライムをマナセの先にした。

この出来事は、非常に重要な一コマです。ヤコブは、よく知っていますね。自分自身が、リベカから生まれる時に、主が母に、兄が弟に仕えるようになるかと語られていました。そして事実、祝福をエサウから奪い取っていました。今、ヤコブは同じように、祝福が兄ではなく、弟のほうに交差するのだということを示されていました。しかし、エサウの時とは異なり、兄マナセが祝福を受けないのではなく、彼も一つの民となり、大いなる者となります。しかし、弟のほうが大きくなります。また、異邦人の諸国の中で、子孫が満ちるようになるのです。そして、エフライムは事実、北イスラエルの代表となり、北イスラエル全体を指す時に、ただエフライムと呼ばれるようになります。

ところで、なぜ主は、弟を兄ではなく選ばれたのでしょうか？これは、ずっと神の選びに見られることでした。アダムの息子カインとアベルでは、弟アベルが信仰によって応答していました。そして、アブラハムの息子イサクとイシュマエルでも、兄ではなく弟が、約束を受け継いでいます。そして、ヤコブとエサウです。

これは、ロマ 9 章を見て行かないといけません。「ロマ 9:10-13 それだけではありません。一人の人、すなわち私たちの父イサクによって身ごもったリベカの場合もそうです。11 その子どもたちがまだ生まれもせず、善も悪も行わないうちに、選びによる神のご計画が、12 行いによるのではなく、召してくださる方によって進められるために、「兄が弟に仕える」と彼女に告げられました。13 「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ」と書かれているとおりです。」行いではなく、選びによる神のご計画が、召してくださる方によって進められるため、なのです。

人の肉によれば、兄が選ばれるのです。それが自然の成り行きです。しかし、神は敢えて、ご自

身の選びによって召すのだということを示すために、そのあべこべのことを行われるのだということです。そこでパウロは、コリントの教会に対して第一の手紙で、神が恵みによって、あべこべの選びを行われることを、次のように述べました。「Ⅰコリ 1:26-29 兄弟たち、自分たちの召しのことを考えてみなさい。人間的に見れば知者は多くはなく、力ある者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。27 しかし神は、知恵ある者を恥じ入らせるために、この世の愚かな者を選び、強い者を恥じ入らせるために、この世の弱い者を選びました。28 有るものを無いものとするために、この世の取るに足りない者や見下されている者、すなわち無に等しい者を神は選ばれたのです。29 肉なる者がだれも神の御前で誇ることがないようにするためです。」

お分かりになるでしょうか？神の恵みによって、私たちは選ばれます。そして、その時、私たちは自分の愚かさ、取るに足りないこと、弱い時、無にされている時、そういった私たちを神は敢えて選ばれます。自然の成り行きによれば、当然、選ばれてよい者たちを選ぶのではなく、敢えてあべこべで選ばれることによって、神こそが知恵があり、力があることが現れ、神に栄光が行くのです。

ですから、私たちが養子縁組になるということ、神の子どもになるということがどういうことかが、お分かりになったと思います。私たちが信仰を継承するとは、神の圧倒的な恵みの中で行われることです。キリスト者として生きるとは、どういうことをぜひ知っていただきたいです。それは、神からの恵みの挑戦なのです。相応しくない自分を、神は一方的に、高みへと引き上げてくださったのです。分かりやすく言えば、そこら辺で捨てられていた孤児、その生まれた日もよく分からないような孤児が、皇室のメンバーに選ばれたと言うことなのです。いや、それ以上です！

だから、私たちは、自分を卑下する暇などないのです！主は、ヤコブを選ばれ愛されたように、あなたをこよなく愛し、選ばれました。神の子どもとして、キリストにある養子として選び、拾ってくださったのです。その恵みの選びにふさわしく歩むように、召されています。キリスト者になったところで、変わることはないというのは、恵みによって奇跡を行う神に対して、失礼です！主が、豊かに祝福してくださるのです、それを受け取りましょう。

3A ヨセフの墓 21-22

²¹ イスラエルはヨセフに言った。「私は間もなく死ぬだろう。しかし、神はおまえたちとともにおられ、おまえたちを先祖の地に帰してくださる。²² 私は、兄弟たちではなくおまえに、私が剣と弓でアモリ人の手から取った、あのシェケムを与えよう。」

最後に、ヨセフ自身にイスラエルは語っています。シェケムと言えば、シメオンとレビが虐殺と略奪によって奪い取ったカナンの町です。けれども、ヤコブは家の長としてそこを自分がそうしたのだと責任を引き受けています。そして、その時に幼かった、加担していないヨセフに受け継がせることに決めました。そして、ヨセフはシェケムで葬られることになります。